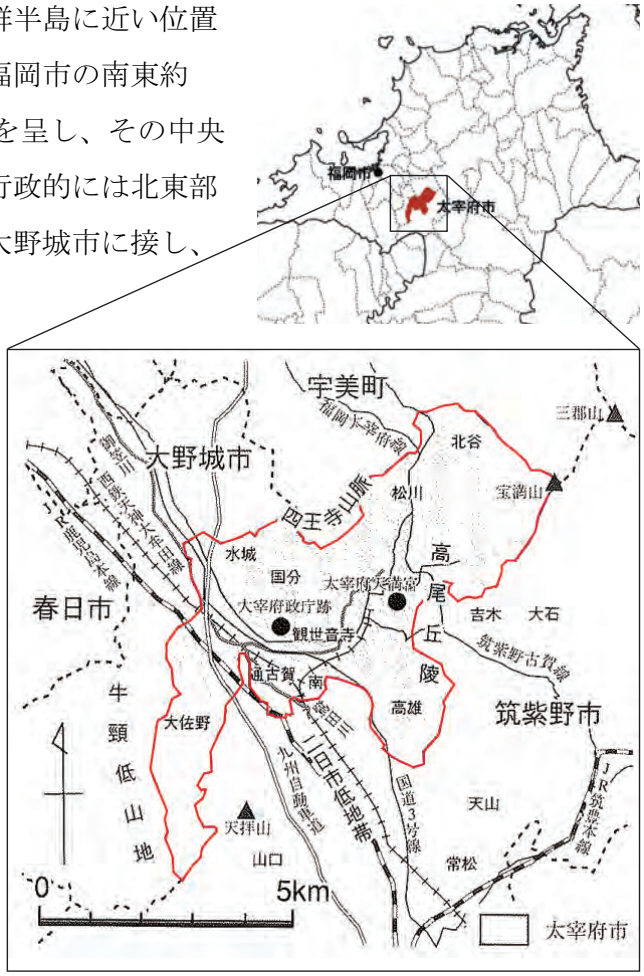
第１章　太宰府市の歴史的風致形成の背景

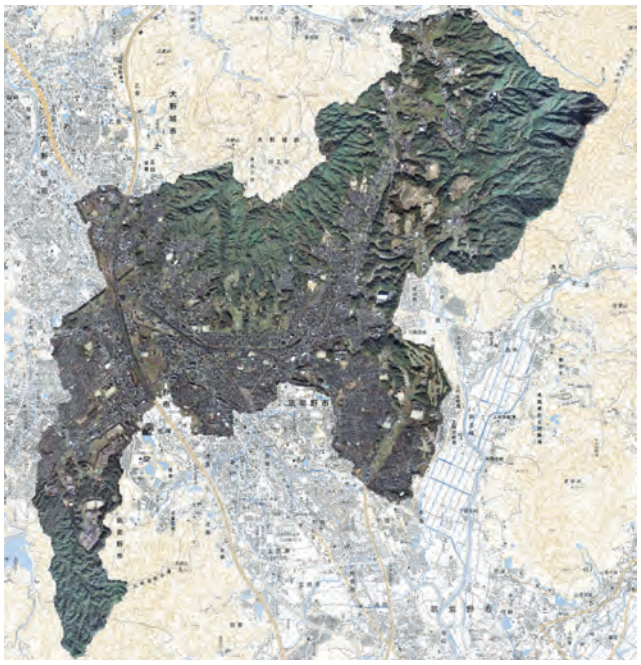
１　自然的環境

太宰府市は九州島の北端に位置し、大陸や朝鮮半島に近い位置にあり、古くから交流が盛んに行われてきた。福岡市の南東約16km にあたり、東西北を山地で囲まれ、盆地状を呈し、その中央を御笠川水系が博多湾に向かって流れている。行政的には北東部は糟屋郡宇美町、南東部は筑紫野市、北西部は大野城市に接し、面積は 29.60 ｋ㎡である。



太宰府市の位置

北に四王寺山脈（最高点 410m）、東に高雄丘陵をはじめ愛獄（おたけ）山から宝満山（829m）へと連なる三郡山地があり、狭長な二日市低地を挟んで、西を脊振山地の前山となる牛頸低山地（最高点 333m）に囲まれている。三方を山に囲まれるが、北西側は福岡平野に、南側は筑紫平野に接し、北部九州と中南部九州を結ぶ交通の要地となっている。市域の大部分は博多湾に注ぐ御笠川とその支流の流域であるが、北部の山浦川は多々良川水系であり、四王寺山の北側を博多湾へ下る。東部の三郡山地と高雄丘陵との間は、宝満川を経て筑後川から有明海に注ぐ原川の流域である。これらの山地の山麓部は、基盤層である花崗岩が浸食されて形成された丘陵や土石流の堆積によって形成された扇状地、および扇状地の下方浸食で形成された段丘地形が見られるが、昭和 40 年代以降、大規模な宅地化と土取りが進み地形の変化をもたらしている。

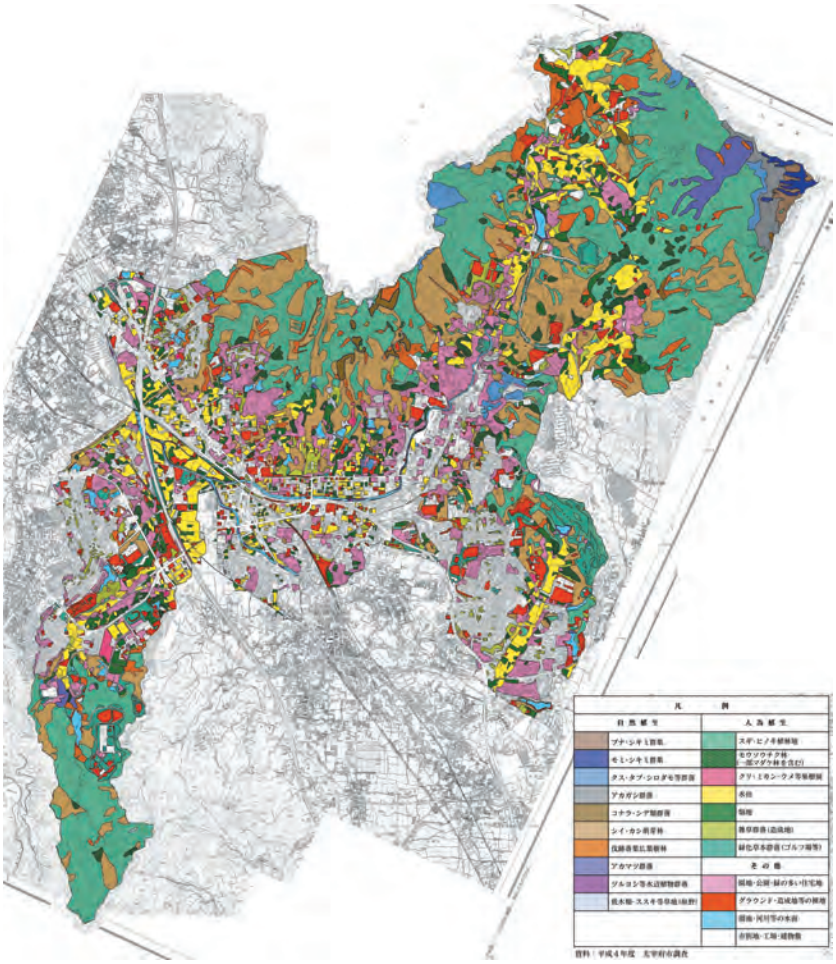


太宰府市の地形

（背景に国土地理院発行 25000 分の１地形図「福岡南部」「太宰府」「不入道」「二日市」を使用）

山地に囲まれた集水地形や、年間 1,500mm の降水量は市域の緑を豊かなものとしている。本市の植生は市の総面積に対して植生 60%（森林 41%、農耕地 11%、公園・史跡等の環境緑地８%）、無植生 40%である。植生のうち、天然性林は宝満山周辺の標高約 700 メートル以上に見られるブナ、モミ、アカガシを主体とし、植生

の 1.3%のみである。太宰府市の植生は過去から人為を受け続けており、その代表的なものが草地と雑木林からなる里山や造林された人工林であるが、昭和 30 年代以降手入れがされなくなり、多くがスダジイ・アラカシ・スギ・ヒノキのなどの緑の濃い森林となっている。近年は低地から丘陵に孟宗竹が侵入している場所が増えている。



現存植生図

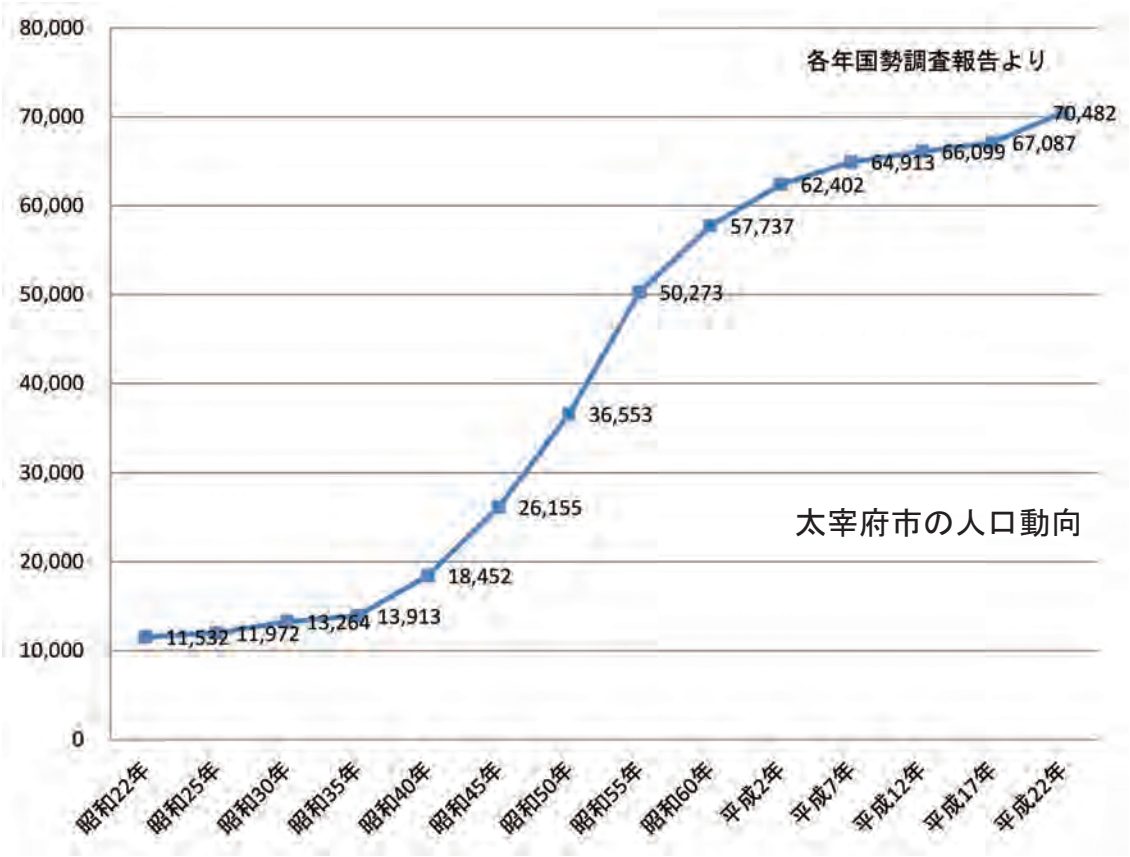
気候は、北部九州から山口県にかけて分布する日本海型気候区に属するが、内陸型気候区に隣接しているため、福岡市などの沿岸部と比べると年平均気温（16.2℃）は低めであるが、夏季の最高気温（37.5℃）は太宰府が高い。年降水量は沿岸部より多い傾向にあるが、人口増加に伴う水需要の厳しい場所でもあった。昭和 53(1978) 年には 156 日、平成６～７年には 300 日にわたる給水制限が行われた。現在は北谷ダムや福岡地区水道企業団からの受水の増加で安定供給が図られるようになった。一方、梅雨の時期には集中豪雨や台風などによる災害に見舞われることがある。平成 15(2003) 年には長雨で地盤が弛んだところに時間 100mm の降雨があり、四王寺山をはじめ各所で土石流が発生し大きな被害をもたらした。また、平成 18(2006) 年の台風は局地的強風により、特別史跡水城跡上の樹木を倒し土塁が毀損している。

２　社会的環境

（１）人口

太宰府市は福岡都市圏の住宅都市として、昭和 40 年代から人口増加の一途を辿ってきた。人口動態は社会増加が自然増加を上回る傾向にあり、福岡都市圏からの流入が主な要因であった。その当時の宅地開発に伴う人口の急増期と比較すると、昭和 60 年以降の社会増加数は落ち着きを見せ、平成に入ってからは微増傾向である。一方で、65 歳以上の割合は年々増加しており、また 15 歳未満の割合が年々低下し、少子高齢化の現象がみられる。平成 27(2015) 年の高齢化率は 25.7%

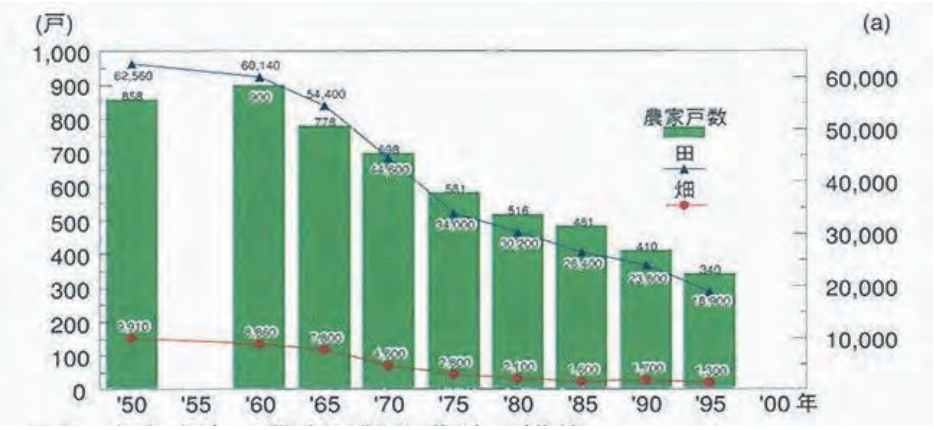
で、特に古い宅地開発地では世代更新が図られず、第一世代だけが残り高齢化率が 40%に近づいているところも出てきている。



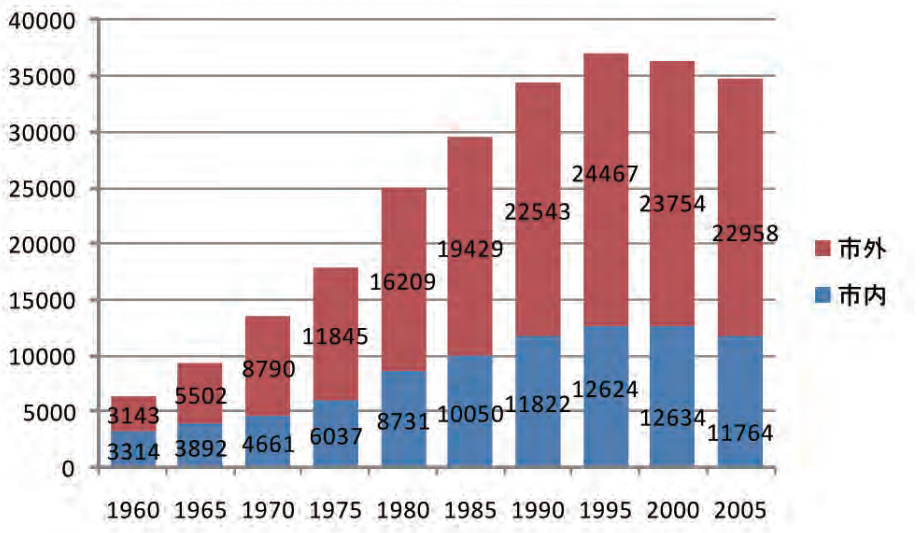
（２）産業

近代の太宰府は都市近郊の農村であるとともに、博多織などの伝統産業の工場の立地も見られた。一方で、太宰府天満宮門前での観光も生業となっていた。

現在の太宰府市の就業構造は第三次産業への特化が顕著である。市外へ通勤している市民が多いのが特徴で、昭和 35(1960) 年には市民の約半数が市内で従業・通学していたが、平成 17(2005) 年には太宰府市の全就業者数 34,722 人のうち、22,958 人（66.1%）が市外への通勤・通学者となっている。一方で、第一次産業の占める割合は極めて低く、農村的色彩はかなり弱まっている。



農家戸数と農地の推移



各年国勢調査より

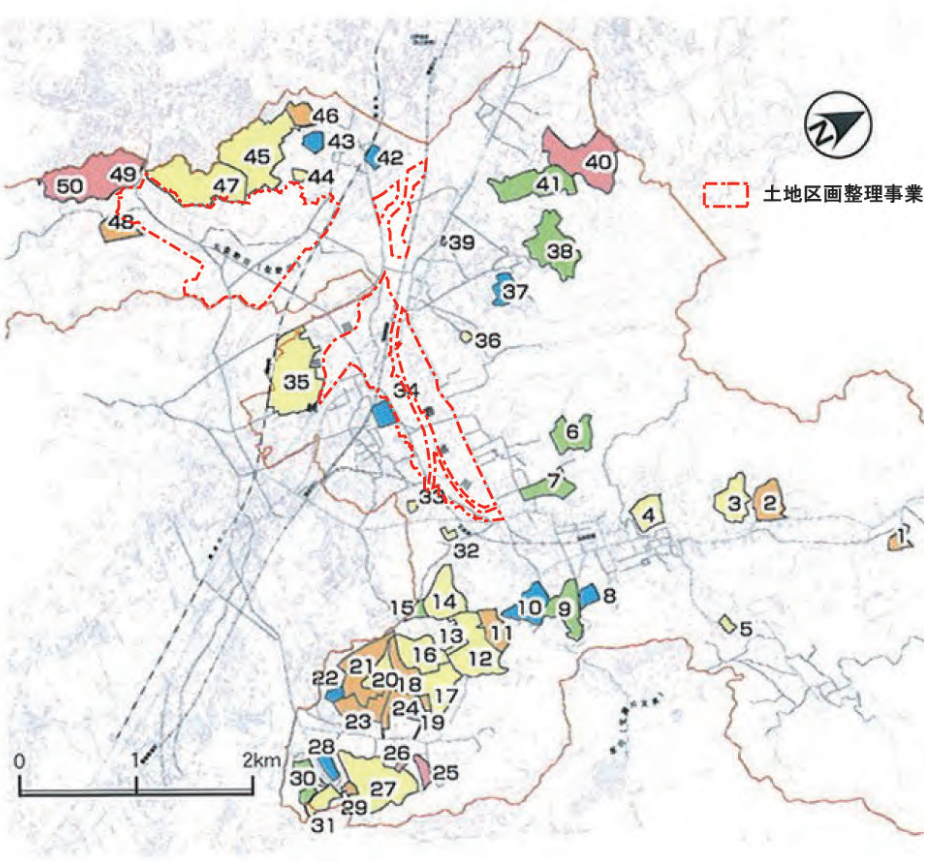
太宰府市民の通勤・通学状況の推移

また、本市は年間 821 万人（平成 26(2014) 年）の参詣者、観光客が訪れており、近年は、東アジアを中心に海外から訪れる人々も多く見られるようになってきた。天満宮門前を中心に、これらの人々を対象にした観光産業が成立している。商店の構成をみるとチェーン店が増えるなど、客層、商店構成、商品構成の多様化が進んでいる。

本市は、人口規模に比して高校（４校）や大学等（９校）が多く立地しているのも特徴である。

（３）宅地開発

本市は、福岡都市圏に入り開発圧力が高く、住宅都市として開発が進展してきた。1950 年代の国分や通古賀の県営住宅や鉄道の路線駅に比較的近い平坦地の開発から始まり、その後、四王寺山麓など周辺丘陵部へ拡大してきた。特に、1970 年代には太宰府で初めて下水道を備えた都府楼団地が造成されたのをはじめ、国道３号整備と合わせて南東部の高雄の丘陵地では、複数の開発が行われ丘陵のほとんどが宅地へと変化した。1980 年代からは観世地区、佐野地区、通古賀地区と区画整理が実施されている。



時期	番号	団地名
'67以前	8	湯ノ谷北
'67以前	10	湯ノ谷西
'67以前	22	梅ヶ丘
'67以前	28	光ヶ丘
'67以前	34	榎寺住宅
'67以前	37	国分ヶ丘
'67以前	42	国鉄住宅
'67以前	43	薬振
—	—	—
'62	7	白川
'65	9	湯ノ谷南
'68	6	観世
'68	15	(高松不動産)
'68	30	国税局
'68	38	国分台
'69	41	水城台
'70	5	ニュー菅谷
'70	14	三条
'70	31	日本勤労者住宅
'70	35	都府楼
'71	20	梅香苑1期
'71	47	長浦台
'71.10.14	3	三条台
'72	12	東ヶ丘
'72	16	星ヶ丘1期
'72	45	青葉台第1期

時期	番号	団地名
'72. 7. 2	13	スコーレ西日本
'72.10.20	27	高雄台
'73. 6	4	浦ノ城
'74. 2. 5	36	スコーレ西日本
'74. 5.11	17	星ヶ丘2期
'74. 7.22	33	(徳永開発)
'74. 9	44	スコーレ吉松
'74.10.15	32	(日綿実業)
'75. 1.14	11	太宰府ハイツ
'75. 8.11	2	大原
'75.12.25	21	梅香苑2期
'76	48	大佐野
'76.10.16	24	長崎セクルトハウジング
'76.12. 8	23	泉ヶ丘
'77.11.19	18	星ヶ丘3期
'77.12.24	1	万葉台
'78. 6.29	19	星ヶ丘4期
'79. 4.21	46	青葉台第2期
'79.12. 4	29	高雄ハイツ
'80. 2.12	39	泰栄開発
'82	40	イトーピア
'82	50	共同施行区画整理
'82.10. 5	25	(竹下住宅)
'88	49	共同施行区画整理
'93. 8.18	26	(竹下住宅)

大規模宅地開発の動向

（４）交通

本市は北部九州と中南部九州を連結する位置にあり鉄道、道路網が南北方向に発達している。

道路は、高速道路は九州自動車道があり太宰府インターチェンジが置かれ、市域における路線長は３km 程である。インターチェンジの１日平均出入台数は 70,000 台（平成 24 、ふくおかデータウェブ有料道路利用状況）で県内でもっとも利用されるインターチェンジとなっている。一般道路は国道３号（6.5km）と県道 11 路線（23.6km）が主要な幹線道路となっている。市道の路線数は 1700 余りあり、その総延長は 320km 強、約 90%が舗装されている（数字は平成 27(2015) 年４月１日）。

鉄道は、九州旅客鉄道（鹿児島本線都府楼

太宰府市の主な交通網

南駅、１日平均乗降約 2,010 人、平成 26 年度）及び西日本鉄道（以下、西鉄）（福岡天神大牟田線都府楼前駅、太宰府線五条駅、太宰府駅、１日平均乗降約 24,460 人、平成 26 年度）の駅が立地している。特に西鉄太宰府線は、沿線にある高校や大学への通学や、福岡市などへの通勤として市民の日常の移動手段となっているほか、太宰府天満宮や九州国立博物館への公共交通機関となっている。

また、市内の移動には平成 10(1998) 年に開始した太宰府市コミュニティバスまほろば号が運行されており、１日平均約 1,310 人（平成 26 年度）に利用されている。

さらに、福岡空港が市中心部から車で 30 分程度のところに位置していることから、国内外からの観光客がアクセスしやすい環境にある。

３　歴史的環境

（１）原始

大陸と地続きであったとされる後期旧石器時代は、地峡である太宰府は格好の狩猟の場であったと想像される。四王寺山や宝満山など太宰府を囲む山麓のほか、平坦地でも数か所でナイフ形石器や三稜尖頭器などの狩猟具・解体具などが出土し人の活動の痕跡が認められる。遺跡としては大佐野地区の脇道遺跡で台形石器を主体とする石器群が出土している。縄文時代も引き続き山裾に遺跡が散発的に発見されているが、本格的な集落が展開するのは弥生時代からである。国分、向佐野、大佐野、高雄、般若寺、観世音寺地区などが挙げられる。国分地域での弥生時代の集落遺跡からは細形銅戈や中広銅矛鋳型など権力の存在を示唆するものが出土している。これらは御笠川下流の福岡市に所在する集落との関係が指摘されている。また、向佐野、大佐野地区の集落からはアワビ形土器やオールを備えた舟の絵画土器が出土し、博多湾沿岸部との交流が想定される。一方、般若寺台地の筑紫野市二日市丘陵では青銅製の剣と鏡を持つ甕棺が発見されているが、この遺跡はさらに南側に展開する小郡市から筑紫野市

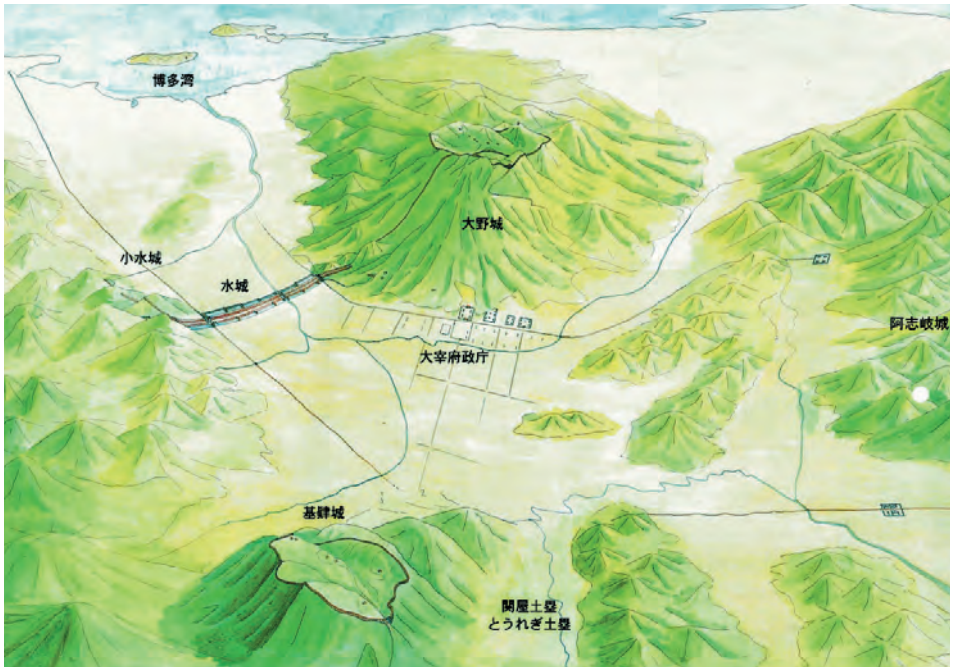
弥生時代の集落分布

にかけての巨大集落群の北辺の遺跡と考えられる。国分、向佐野、大佐野、高雄地区では引き続き古墳時代の集落や墳墓が形成されている。古墳時代は国分、向佐野、大佐野、高雄地区では引き続き集落や墳墓が形成されていが、後期になると周辺市町では山裾に群集墳が密集するが、太宰府市域ではその数は極端に少なく、南北勢力の緩衝地帯になっていたと推定される。一方、吉松地区の神ノ前２号窯から７世紀初め前後の須恵器とともに発見された瓦は、須恵器工人による初期のものであり、福岡市博多区の那珂遺跡で使用されていたことが判明した。このように太宰府市内の原始時代の集落は御笠川水系の博多湾側につながりを持つものと、筑後川北辺の地域とのつながりを持つものの二つの群が存在した可能性が指摘され、太宰府地域は在地勢力の緩衝地帯であったと考えられている。

（２）大宰府の設置と条坊

「日本書紀」によれば、天智２(663) 年に朝鮮半島でおこなわれた白村江の戦いに敗退したことにより、九州北部は国防の最前線として、翌天智３(664) 年には水城が、天智４(665) 年に大野城と基肄城が築かれ、太宰府が軍事的、政治的拠点として位置づけられた。これらの施設は脊振山系や三郡山系を取り込み、総延長 40km 以上の巨大な防衛施設（羅城）であったとされる。発掘調査によれば７ 世紀後半頃に大野城が築かれた四王寺山の麓に官衙が営まれ、８世紀の大宝律令によって、古代最大の地方官衙である「大宰府」が名実ともに成立した。太宰府の名称はこれが起源であり、その繁栄ぶりは「続日本紀」神護景雲３ (769) 年 10 月条に「（太宰府は）人物殷繁、天下之一都会也」と記されている。

令に規定された大宰府は九州島の北辺にあって西海道九国二島を統括し、外交の窓口、また辺境防備を担っていた。その中心である大宰府政庁は回廊と築地塀に囲まれ、正殿を中心に脇殿・後殿を備えた朝堂院形式であり、東西約 700m、南北約 250m の範囲を中心に曹司群（各種官庁）の存在が知られる。防衛施設で囲まれた平地には、東西南北の碁盤目の道路によるまち区割である条坊

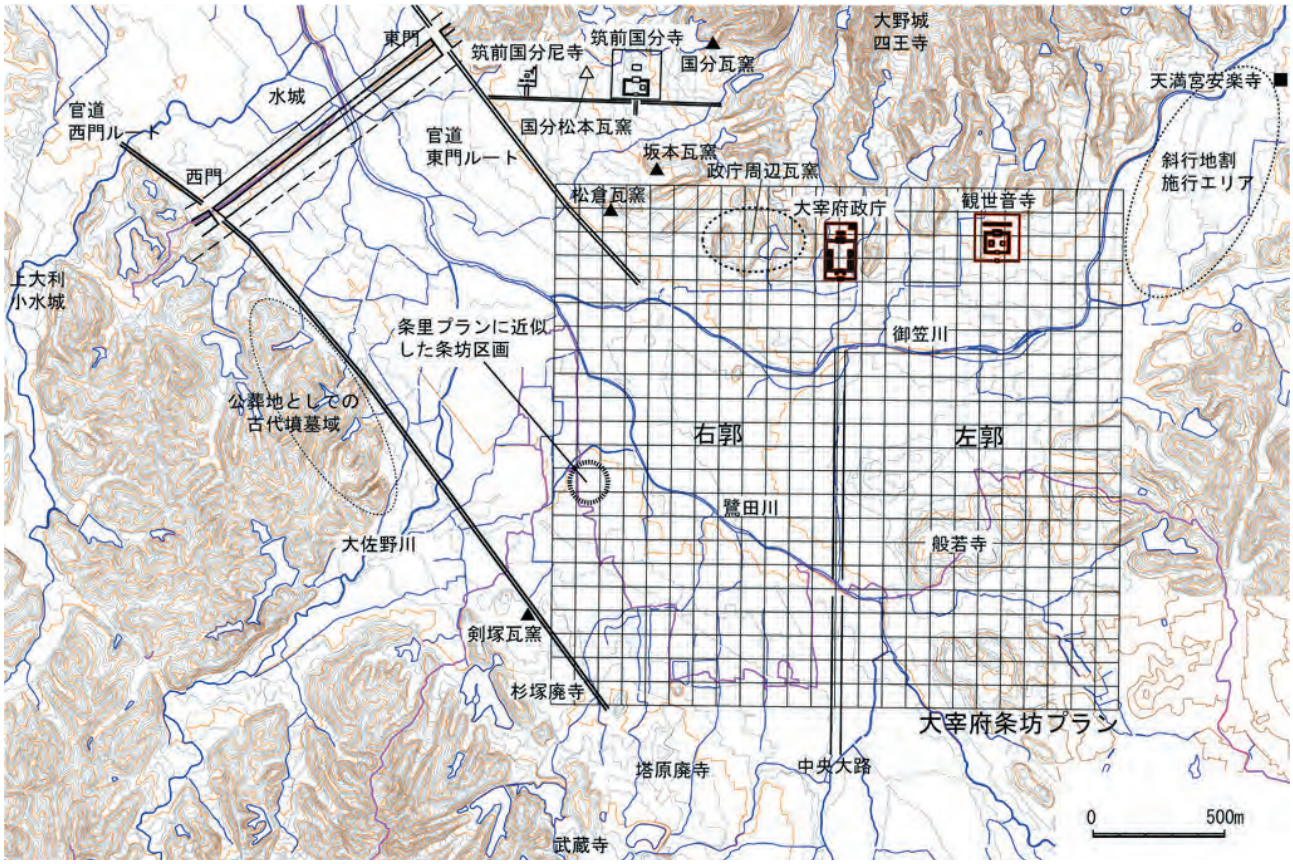


大宰府の羅城イメージ

が整備された。都と同様の日本的な都城型の都市であった。「大宰府条坊」は、観世音寺や宇佐神宮の土地所有に関する平安時代中～後期の記録にみられる条坊表記から、中心街路を境に西を右郭、東を左郭と呼称し、南北 22 条、東西 24 坊あったと想定されている（鏡山猛「大宰府都城の研究」1968 年）。古代の地方での計画的都市が 7 世紀から 12 世紀にわたり長期間存続した希有な例であり、現代の太宰府市街の姿にも大きな影響を与えている。現在の太宰府天満宮神幸式の経路はどんかん道と呼ばれ太宰府天満宮から榎社を往復するものであるが、これも条坊を踏襲したものである。大宰府関連の施設は羅城内部だけでなく、博多湾沿岸に外交使節を迎える鴻臚館などが置かれた。往来のための道路も整備され、特に鴻臚館から大宰府に至る道路は新羅使など海外使節の通路と考えられ、幅 10m 程の道路がほぼ直線で敷設され、水城西門を通過し大宰府条坊の南辺で朱雀大路に接続していた。

大宰府政庁跡

大宰府には都から多くの官人が赴任し、都風の文化が太宰府にもたらされた。文芸では奈良時



大宰府条坊模式図

代に編まれた「万葉集」（20 巻、約 4500 首）には筑紫に関する歌は 380 首ほどにのぼる。太宰府では大宰帥大伴旅人・筑前国守山上憶良を中心に万葉集筑紫歌壇と呼ばれる歌人集団が形成され、天平２（730）年に大伴旅人邸で行われた大陸渡来の梅花を愛でる雅宴がひらかれ、「梅花の歌三十二首」が歌われた。平安時代になると、和歌、歌物語、漢詩などが太宰府との関連で作られた。和歌では歌枕に「染川」「筑紫」「竈門山」をはじめ「苅萱の関」「水城」があげられる。そのなかでも「染川」は平安時代の代表的歌学書である「能因歌枕」「和歌初学抄」「五代集歌枕」「八雲御抄」のすべてに歌枕として掲載されており、人々に広く認知されていた。歌物語では「伊勢物語」や「大和物語」に「檜垣媼」など太宰府を題材とした話が掲載されている。菅原道真が太宰府で詠んだ 38 編の詩は「菅家後集」に編まれた。

（３）古代の寺院群

筑紫で亡くなった斉明天皇供養のため天智天皇が発願した観世音寺は大宰府政庁域の東に建立され、天平 18（746）年に供養が行われた。同寺には天平宝字５（761）年に唐僧鑑真が伝えた正統な戒律・授戒作法にしたがって東大寺に建立された戒壇院にならい、西海道諸国を担当する西戒壇が置かれ、府大寺としての地位を不動にした。また、現在国宝に指定されている梵鐘は、京都妙心寺の梵鐘と兄弟鐘とされる。妙心寺鐘には「戊戌年四月十三日壬寅収、糟屋評造春米連広

古代、中世の寺院及び拠点（赤：古代、青：中世）

国鋳鐘」銘があり、文武天皇２（698）年に、筑前国糟屋郡で鋳造されたことがわかり、観世音寺鐘も同所で妙心寺鐘に先立って鋳造されたと考えられている。国分地区には天平 13（741）年の国分寺建立の詔を契機に筑前国分寺・国分尼寺が創建された。四王寺山には宝亀５（774）年に「大宰府に四王院を起こす」（「扶桑略記」）とあり、新羅からの呪詛を打ち払う鎮護国家祈祷の寺として設置された。また、四王寺別院として円珍の弟子華台坊により原山無量寺が天安２（858）年に建立されたと伝えられる。宝満山の西麓には竈門神社の神宮寺である竈門山寺（大山寺）があった。延暦 22（803）年に「最澄和尚は大宰府竈門山寺において、渡海の四船（遣唐使）の平達のために、檀薬師仏を四軀敬造す」と「扶桑略記」に現れている。菅原道真の霊廟から発展した安楽寺（天満宮）は延喜（901 ～ 923）年中に建立され、観世音寺をも凌駕する新興私寺勢力となっていった。

（４）中世都市太宰府

律令国家は平安時代に大きく変化したが、大宰府を中心とした政治の仕組みは中世（鎌倉・室町時代）へも変容しながら存続していたため、大宰府の官職（帥など）は任命され続けた。鎌倉時代の太宰府は天野遠景や武藤資頼など幕府の鎮西奉行が居住し、古代以来の大宰府機構と関って九州支配をおこなっていた。11 世紀後半に廃絶した大宰府政庁は再建されず、政治的中心は観世音寺の東である小字「御所の内」に移ったと考えられる。特に武藤氏は大宰府機構の少弐を継ぎ、武藤少弐氏と呼ばれるようになった。

13 世紀後半の蒙古襲来は九州の政治的中心を大宰府から博多へと移していった。鎌倉幕府は博多に鎮西特殊合議訴訟機関（弘安７（1284）年）をはじめ次々と出先機関を設置し、鎮西探題（永仁元（1293）年・同６（1296）年）の設置で決定的となるが、依然大宰府機構は文書を発給するなどの機能を有していた。

鎌倉幕府の滅亡とともに、太宰府は南北朝による争奪戦の舞台となった。元弘３（1333）年尊良親王が四王寺山東麓の原山に陣を敷いたのをはじめ、肥後の菊池武敏、足利尊氏と次々に太宰府に入る。その後も南朝勢力の中心であった懐良親王は正平 16（1361）年に太宰府入りし征西府が成立したとされる。一方、北朝方は今川了俊を九州探題として下向させ、応安５（1372）年に太宰府を奪回した。その後、大内氏が、その没落後は毛利氏と大友氏が争いながら太宰府を含めた筑前支配を行った。

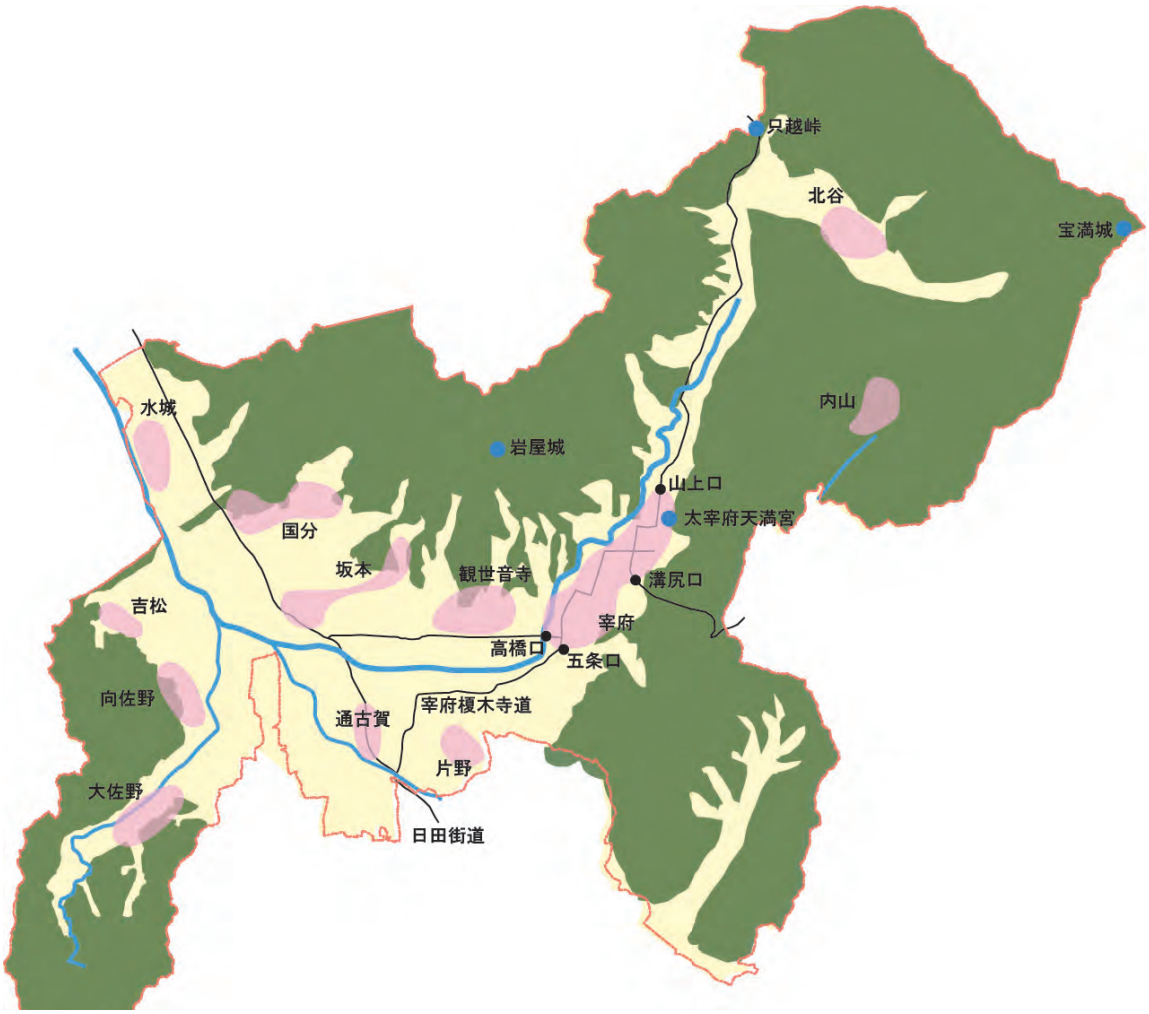
中世寺院は観世音寺や安楽寺（天満宮）ほかの古代以来の寺院に崇福寺や光明寺などの新興禅宗寺院が増加し、政治的中心が博多に移った後も、宗教都市としての性格を保ち続けた。宝満山麓の大山寺は博多綱首と関係をもち、日宋貿易に関与していることが知られ、観世音寺戒壇院での授戒は南北朝時代にかけて行われていた。また、石塔や磨崖仏の造営が活発に行われるなど、宗教的高揚が見られる。このような中、太宰府の寺社への参詣が広がったと考えられる。特に安

楽寺に参詣した貴族や文人は、社頭で和歌や連歌を詠むことが多かった。文明 12（1480）年の飯尾宗祇や永正 14（1517）年の宗碩の太宰府参詣は連歌師の代表的なものである。

産業に関しては、発掘調査によって観世音寺の南から五条・鉾ノ浦にかけて鋳物師が活動していたことが分かる。鋳型の破片から椀や五徳、和鏡などの生活具から梵鐘や華瓶、金鼓、鰐口などの仏具まで、広く生産していたことが判明した。また、「六座目録」「六座之記録」という六座に関する史料が伝わっている。六座は太宰府の米屋（古川家）・金屋（平井家）・小間物屋（安武家）・相物屋（古川家）・紺屋（船越家）・鍛冶屋（斎藤家）の座のことである。源頼朝より九州の「諸商売頭座」を仰せつけられたという伝承が「六座之記録」に記されている。六座は毎年６月 15 日に観世音寺と太宰府天満宮で能を舞っていた。

（５）太宰府天満宮門前の形成と発展

戦国時代末期には、四王寺山にあった岩屋城や宝満山山頂近くにあった宝満城の攻防に代表されるように、市中も戦乱に巻き込まれ、天正６（1578）年には天満宮安楽寺が、天正 14 年には崇



近世の集落分布と街道

福寺が焼失したのをはじめ、山麓を占めていた寺院などは存続できない状況であった。

現在の太宰府市域は江戸時代には福岡藩領であり御笠郡に属していた。宰府宿と街道筋にはまち並みが連なっていたが、他は農村であった。黒田長政が慶長７（1602）年に実施した検地の結果を記したとされる「慶長年中調各村別石高帳」には、北谷村、内山村、宰府村、観世音寺村、片野村、通古賀村、坂本村、水城村、国分村、吉松村、向佐野村、大佐野村の 12 ヶ村が記載され、近代に引き継がれていった。

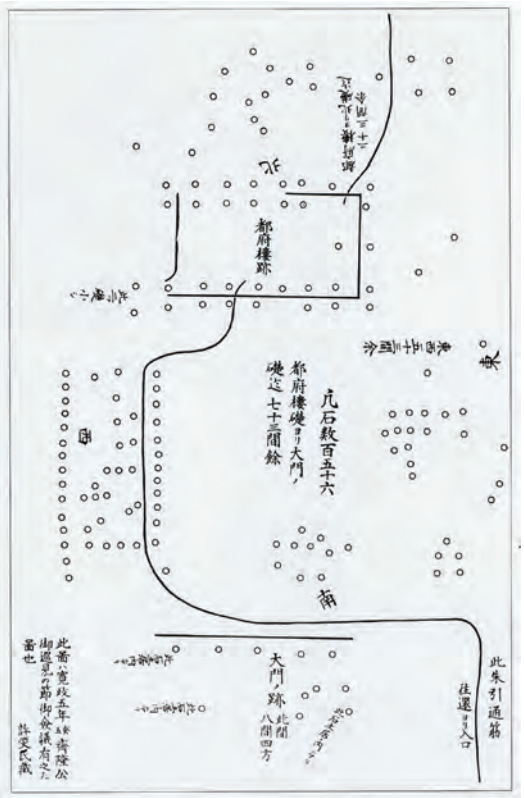
天満宮およびその周辺は天正年間に兵火によって灰燼に帰していたが、天正 19（1591）年に小早川隆景によって天満宮本殿が復興され、文禄元（1592）年には神幸式が再興された。太宰府は街道に直接つながっていなかったが、藩の宿に指定され、天満宮の門前付近が宰府宿となった。宰府宿は太宰府の盆地状の平地の北東方向に延びる楔状の平地に展開し、博多から日田へ向かう日田街道からは現在の関屋交差点が追分となり参詣道を通って宿へ到る。小倉から長崎へ向かう長崎街道からは現筑紫野市の山家宿から天満宮南の溝尻に至る道があり、北は宇美町からの只越峠を越えて山上（三条）に至る道で結ばれていた。また、二日市へは五条から榎社を経由して行く「宰府榎木寺道」（「戸部文書」）があった。宿の出入口である「構口」はその経路ごとに高橋口、五条口、溝尻口、山上（三条）口が設けられた。宰府宿には大名の寄宿所である「御茶屋」は存在せず、藩主が立ち寄った際の宿泊は天満宮宮司邸である延寿王院であった。宿内は天満宮周辺の社家町街区、門前にあたる現在の西鉄太宰府駅周辺の旅宿街区、現在の五条交差点付近の商職人街区などおおよその職能による棲み分けが見られ、社家町内に藩の施設である代官所（代官屋敷、造営奉行所）などの藩の公的施設が置かれていた。宰府村は宝暦年間（1751 ～ 64）に天満宮領の年貢収納問題が起こり寺社奉行管轄の「社領分」と郡奉行管轄の「蔵納分」に分かれた。社領分の中心が三条、連歌屋、馬場の上三町、蔵納分が大町、新町、五条の下三町であった。「御笠郡村明細記」（享和２（1802） 年）によれば商人は社領分に 58 名、蔵納分に 15 名、職人は社領分に 16 名、蔵納分に 10 名が記載されている。中世以来の六座は「下町六座」として現れ（「一山記録」）、享和２（1802）年に、御神忌の節に諸商人から運上を徴収することを、延寿王院より許可されている。

藩に指定された江戸後期の問屋は大野屋であり、藩主や他藩大名の参詣に際して人馬の手配を行っていた。また、享和元（1801）年の紀行文「筑紫紀行」によれば大野屋は酒や飯を提供する宿屋でもあった。この他、天保５（1834）年２月の記録（「竹森文書」）に宿屋は、笹屋、松屋、泉屋、呼子屋、鶴賀屋、日田屋、博多屋、長門屋、角屋、仕立屋、若松屋などの名が見られる。春の鷽替え、鬼すべ、秋の神幸祭などの四季の歳事にも多くの民衆が参集するようになった。この時代の太宰府は旧来の名所の他、「太宰府八景」などの新名所も成立し、それらの情報が地元絵師による絵画などにより広く知られるようになった。名物としての「梅ヶ枝餅」や「木鷽」などもこの時期に現れている。

（６）近代以降の太宰府

明治政府による神仏分離は太宰府天満宮や門前、宝満山へ大きな影響を与えた。神社の別当・社僧と呼ばれた僧侶は還俗が命じられ、神主・社人として神道に転じるよう布達された。安楽寺天満宮は太宰府神社となり、仏教関係のものは取り払われた。社僧の多くは神社を離れることとなった。そのため山上（三条）の原八坊に起源をもつ僧坊が解体していった。また、馬場を中心とする社家屋敷も分割されていった。さらに、明治 35（1902）年の御神忌一千年祭に合わせて、二日市との間に太宰府馬車鉄道が開通し、大町に太宰府駅ができると宿泊客は減少し、旅館は改業して参道には土産物屋・飲食店・商店が増加した。天満宮周辺の変化と対照的にその他の集落は近世と変わらぬ農村集落の雰囲気を維持していた。しかし、昭和 30 年代になると県道 31 号（通称５号線）を皮切りに、九州自動車道の開通や国道３号バイパスなど新たな道路が整備され、太宰府天満宮へ車による参詣者が押し寄せるようになり、天満宮門前には駐車場が増加していくこととなった。また、福岡都市圏の住宅都市として開発の波も押し寄せ、それまでの農村風景から一転することとなった。

自治体としての太宰府は、明治の初めには北谷・内山・太宰府、坂本・国分・観世音寺・水城・通古賀・片野・大佐野・向佐野・吉松の 12 ヶ村であったが、明治 22（1889）年に北谷・内山・太宰府３ヶ村が合併し太宰府村となり、坂本・国分・観世音寺・水城・通古賀・片野・大佐野・向佐野・吉松の９ヶ村が合併し水城村となった。その後、太宰府村は明治 25(1892) 年に町制を施行した。昭和 30（1955）年には太宰府町と水城村が合併して太宰府町が発足し、昭和 57（1982）年に市制を施行している。



大宰府跡礎石図（寛政５（1796）年・写し）

（７）大宰府関連遺跡の保護

都府楼（大宰府政庁）跡を中心にした古代大宰府関連の遺跡は、現代まで人と遺跡が共に歩んできた歴史がある。室町時代には連歌師飯尾宗祇が記した「筑紫道記」（1480 年）に、大宰府関連の遺跡が廃墟として現れている。江戸時代になると福岡藩の黒田氏は「寛政五（1795）年大宰府跡礎石図」、「文政三（1820）年観世音寺村之内旧跡礎現改之図」を作成し、都府楼跡等の礎石の移動を禁止し、遺跡群の保護が開始されることになる。地誌類にもたびたび登場し太宰府参詣の立ち寄り所にもなり「名所」と認識されていた。明治時代初期には政庁正殿跡の基壇に地元の有力者や学者により石碑が建立され本格的顕彰が行われるようになった。このように、内外か

ら知られることとなった遺跡群は周辺の農村集落を中心に「木を切るな、家を建てるな」と代々脈々と言い伝えられ、その慣習は現代まで続き、昭和 34(1959) 年に行われた観世音寺復興の取組には、仏像搬送が市民ボランティアの手によって実施されている。また、昭和 45(1970) 年から拡大する史跡指定地の拡張の際にも、協議に臨んだ福岡県担当者の記録に見るように、「史跡はいらん」という考えの住民はいなかったと記されている。

大正８（1919）年に施行された「史蹟名勝天然紀念物保存法」により、大宰府関連の遺跡は政府による保護措置が講じられたが、その範囲は狭く、建物礎石等がある部分だけであった。戦後は、昭和 25（1950）年に施行された文化財保護法により引き続き保護が図られた。一方で、昭和 30 年代に始まる高度経済成長と薪に変わる化石燃料の普及は都市化をもたらし、農地や山林として地域の生活と共存してきた遺跡群は大規模開発にさらされるようになった。そのため昭和 39（1964）年から文化財保護委員会（のち文化庁）と福岡県は、遺跡保存範囲の拡大に取り組み、昭和 45（1970）に史跡指定地の大規模拡張（約 120ha）に至った。史跡とその周辺には近世以来の集落（４箇所）を中心に新しい居住地も形成され、新たな共存の歴史を踏み出した。

大宰府政庁跡正殿の石碑

水城大堤の碑

４　太宰府市の文化財の分布状況および特徴

太宰府市には、国、福岡県、太宰府市の指定文化財が総計 111 件（平成 31 年 3 月現在）存在している。その内訳は国指定文化財 45 件、県指定文化財 34 件、市指定文化財 32 件であり、国、県の指定に比べ市の指定は少ない。太宰府市に所在する指定文化財は太宰府天満宮や観世音寺といった社寺建築とそこに収蔵されている彫刻、絵画、工芸品や大宰府関連史跡など市の北側に多く分布している。指定物件の年代を概観すると、古代大宰府から続く本市の歴史性を反映して古代や中世の文化財が多く指定されている。

一方、指定文化財以外の文化財は、市民が未来の市民に継承したいものとして「太宰府市歴史文化基本構想」に「文化遺産」として位置づけ、「見守る・保護する・育成する」取組として平成 23(2011) 年３月から実践し、市域はもとより「太宰府」を語る上で必要となる関連文化遺産の広がりは拡大している。天満宮門前には伝統的な民家建築や石造物などの集積が見られるほか、市内の農村集落にも伝統的な家屋や神社などの歴史的建造物が所在している。また、菅原道真の伝承にまつわる石碑や梅の木など、市街地の中にひっそりとたたずむ文化遺産も多い。

太宰府天満宮末社志賀社本殿

（１）指定文化財の分布状況

ア　国指定文化財

太宰府市に存在する国指定文化財 45 件の内訳は、建造物 4 件、彫刻 19 件、工芸品 5 件、書跡 1 件、古文書 1 件、考古資料 5 件、史跡 8 件、天然記念物 2 件である。建造物は、太宰府天満宮に「太宰府天満宮本殿」、「太宰府天満宮末社志賀社本殿」が所在している。また、大宰府政庁の南約 800m に位置する古代寺院の般若寺跡に「七重塔」がある。

一方、史跡 8 件のうち 7 件が古代大宰府関連の遺跡で、残る 1 件が宝満山である。大宰府関連史跡群は、四王寺山とその山麓一帯に集中している。そのうち「大宰府跡」、「水城跡」、「大野城跡」の３件が特別史跡に指定され、「筑前国分寺跡」「観世音寺境内及び子院跡」などの史跡と合わせるとその総面積（511ha）は市の面積の約 17%を占める。また天然記念物は「太宰府神社のクス」（３本）と「太宰府神社のヒロハチシャノキ」が指定されている。

七重塔

その他、彫刻、工芸、考古資料などの重要文化財については、太宰府天満宮、観世音寺、戒壇院、国分寺、九州国立博物館などに収蔵されている。国宝である観世音寺の「梵鐘」や多くの木造の諸仏などをはじめ、古代から中世の文化財が多く所在している。

イ　県指定文化財

太宰府市に存在する県指定文化財 34 件の内訳は、建造物 5 件、絵画 2 件、彫刻 2 件、工芸品 10 件、考古資料 6 件、有形民俗文化財 2 件、無形民俗文化財 3 件、史跡 2 件、天然記念物 1 件、名勝 1 件となっている。建造物は観世音寺と戒壇院に所在する「観世音寺金堂及び講堂」、「戒壇院本堂」、「戒壇院鐘楼」と天満宮に所在する「天満宮の石造鳥居」、「天満宮の石造燈籠」の 2 点の石造物が指定されている。

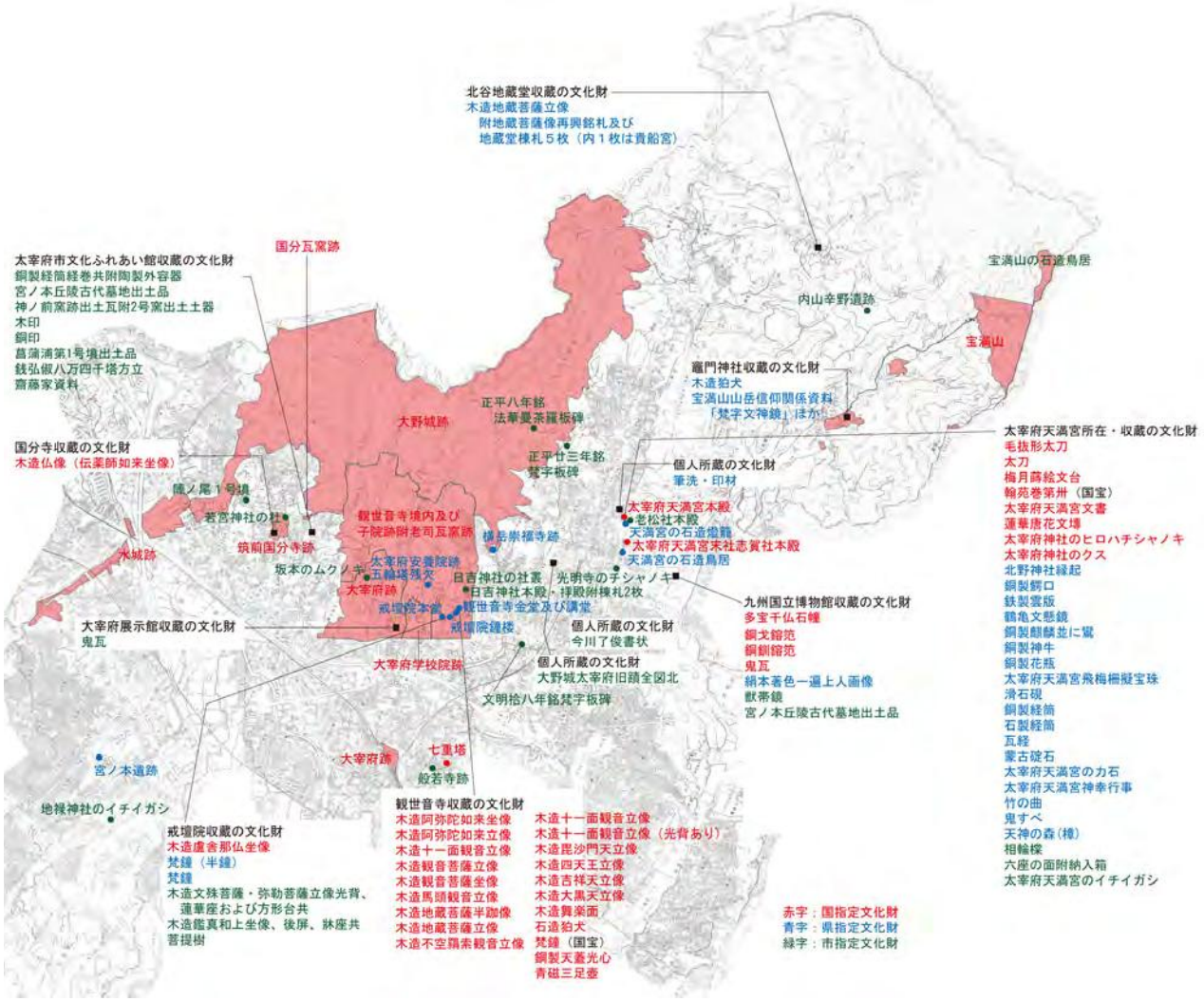
記念物は史跡として「宮ノ本遺跡」と「横岳崇福寺跡」の 2 件、天然記念物として天満宮の「天神の森」が指定されている。また、無形民俗文化財として、いずれも天満宮関連の「太宰府天満宮神幸行事」「鬼すべ」「竹の曲」が指定されている。平成 25 年度には、名勝として昭和 32(1957) 年作の光明寺庭園が新たに指定された。

観世音寺講堂

戒壇院本堂

ウ. 市指定文化財

市指定文化財は 32 件が指定されている。内訳は、建造物 4 件、彫刻 3 件、古文書 1 件、考古資料 12 件、歴史資料 1 件、古文書 1 件、史跡 3 件、天然記念物 7 件である。無形の文化財に関する指定がなされていない。史跡は、「陣ノ尾 1 号墳」と「内山辛野遺跡」などが指定され、天然記念物として「地禄神社のイチイガシ」、「若宮神社の杜」「坂本のクスノキ」などが指定されている。


北谷地蔵堂収蔵の文化財
木造地蔵菩薩立像
附地蔵菩薩像再興銘札及び
地蔵堂棟札５枚（内１枚は貴船宮）
国分瓦窯跡
太宰府市文化ふれあい館収蔵の文化財
銅製経筒経巻共附陶製外容器
宮ノ本丘陵古代墓地出土品
神ノ前窯跡出土瓦附2号窯出土土器
木印
銅印
菖蒲浦第1号墳出土品
銭弘俶八万四千塔方立
齋藤家資料
宝満山の石造鳥居
内山辛野遺跡
宝満山
羅門神社収蔵の文化財
木造狛犬
宝満山山岳信仰関係資料
「梵字文神鏡」ほか
正平八年銘
法華曼荼羅板碑
大野城跡
正平廿三年銘
梵字板碑
太宰府天満宮所在・収蔵の文化財
毛抜形太刀
太刀
梅月蒔絵文台
翰苑巻第卅（国宝）
太宰府天満宮文書
蓮華唐花文塼
太宰府神社のヒロハチシャノキ
太宰府神社のクス
北野神社縁起
銅製鰐口
鉄製雲版
鶴亀文懸鏡
銅製麒麟並に獅
銅製神牛
銅製花瓶
太宰府天満宮飛梅柵擬宝珠
滑石硯
銅製経筒
石製経筒
瓦経
蒙古碇石
太宰府天満宮の力石
太宰府天満宮神幸行事
竹の曲
鬼すべ
天神の森（樟）
相輪樑
六座の面附納入箱
太宰府天満宮のイチイガシ
国分寺収蔵の文化財
木造仏像（伝薬師如来坐像）
個人所蔵の文化財
筆洗・印材
陣ノ尾１号墳
若宮神社の社
観世音寺境内及び
子院跡附老司瓦窯跡
横岳崇福寺跡
太宰府天満宮本殿
老松社本殿
天満宮の石造燈籠
太宰府天満宮末社志賀社本殿
天満宮の石造鳥居
水城跡
筑前国分寺跡
坂本のムクノキ
太宰府安養院跡
五輪塔残欠
大宰府跡
日吉神社の社叢
日吉神社本殿・拝殿附棟札2枚
光明寺のチシャノキ
九州国立博物館収蔵の文化財
多宝千仏石幢
銅戈鎔笵
銅釧鎔笵
鬼瓦
絹本著色一遍上人画像
獣帯鏡
宮ノ本丘陵古代墓地出土品
戒壇院本堂
観世音寺金堂及び講堂
戒壇院鐘楼
大宰府展示館収蔵の文化財
鬼瓦
個人所蔵の文化財
今川了俊書状
大宰府学校院跡
個人所蔵の文化財
大野城太宰府旧蹟全図北
文明拾八年銘梵字板碑
宮ノ本遺跡
大宰府跡
七重塔
般若寺跡
地祿神社のイチイガシ
観世音寺収蔵の文化財
木造阿弥陀如来坐像
木造阿弥陀如来立像
木造十一面観音立像
木造観音菩薩立像
木造観音菩薩坐像
木造馬頭観音立像
木造地蔵菩薩半跏像
木造地蔵菩薩立像
木造不空羂索観音立像
木造十一面観音立像
木造十一面観音立像（光背あり）
木造毘沙門天立像
木造四天王立像
木造吉祥天立像
木造大黒天立像
木造舞楽面
石造狛犬
梵鐘（国宝）
銅製天蓋光心
青磁三足壺
戒壇院収蔵の文化財
木造虚舎那仏坐像
梵鐘（半鐘）
梵鐘
木造文殊菩薩・弥勒菩薩立像光背、
蓮華座および方形台共
木造鑑真和上坐像、後屏、脇座共
菩提樹
赤字：国指定文化財
青字：県指定文化財
緑字：市指定文化財

指定文化財の分布

（２）指定文化財以外の文化財の分布状況

ア　有形の文化財

●門前の歴史的建造物

太宰府市内で伝統的な民家建築が集中して見られるのは、天満宮の門前の町屋群である。現在は土産物屋が多いが、建築当初は商家、旅館、手工業などさまざまな職種が含まれていた。敷地は短冊状で奥に長いものがほとんどであり、主屋の一方に通り土間を持ち、一方に一列または二列に部屋が並ぶ平面形式が参道の町屋に共通している。現在、多くは店舗として利用されているため、大規模な改造が行われているものもあるが、古くは江戸時代後期から、明治、大正期の建築が残っている。

天満宮門前の歴史的建造物

●天満宮の歴史的建造物

太宰府天満宮の境内には、指定文化財以外にも楼門、回廊、絵馬堂や 33 の摂末社のほか、延寿王院、定遠館、文書館などの江戸から大正期の建造物が所在する。

楼門

絵馬堂

延寿王院

●集落神の歴史的建造物

古くからの農村集落には、集落神を祀ったり天満宮と縁ある神社が鎮座している。天満宮本殿が五間社流造のためか、市内の木造の神社本殿はほとんどが流造である。正徳 4（1714）年前後に建立されたとされる日吉神社本殿など、歴史的に価値の高い建造物が残っている。

一方、農村集落の本殿には石造のものも多くみられる。これらの本殿は比較的小さく、正面の

幅が二尺から四尺、奥行きは一尺五寸から三尺弱である。屋根は、切妻造、入母屋造、寄棟造などが見られ、正面に唐破風を飾っているものもある。

日吉神社本殿

坂本八幡神社

●路傍の石造物

日田街道などには、さいふまいりの経路の名残を残す道標などが残っている。また、神牛塚、衣掛石など各地に残る菅原道真にまつわる伝承を物語る石碑は、地域の人々によって大切に管理、継承されている。

天満宮門前には、商売繁盛や豊作の神として祀られる恵比寿が地区ごとに所在し、毎年恵比寿まつりが開催される。また、恵比寿とともに風邪、咳などの治病神あるいは作神、福神としての庚申塔や猿田彦が各所にみられる。

道標

恵比寿

猿田彦

●絵画

太宰府に残る絵画の代表的な作者として齋藤秋圃と秋圃に師事した吉嗣家と萱島家があげられる。齋藤秋圃は江戸後期に活躍し安政６（1859）年 92 歳で没するまで、丸山四條派の画風を筑前にもたらし、現在でも筑前から筑後にかけての旧家にて所蔵されている。

天満宮の神職であった吉嗣家は、文化 14（1817）年の梅仙が秋圃に師事したのが始まりであり、梅仙の作品は太宰府市や筑紫野市の神社などに見ることができる。子の拝山、孫の鼓山も画家として活躍し、天満宮や各集落の鎮守の絵馬や扁額などに見ることができる。

萱島秀渓絵馬（天満宮絵馬堂）

萱島家は初代鶴栖が秋圃に師事し、以来、同所で秀山―秀峰―秀渓と続いており、太宰府天満宮や個人像をはじめ太宰府から福岡にかけ絵馬などが存在している。秀山が別宅として大正年間に建築した四王寺山荘で現在５代目秀月が絵師を継承している。萱島家は、平成25(2013) 年３月に「太宰府の絵師萱島家」として太宰府市民遺産第８号に認定されている。

四王寺山荘の秀月の仕事場

イ　無形の文化財

●木鷽制作

１月７日の夜、鬼すべの前に行われる鷽替え神事で使用される木鷽は、コシアブラを加工し鷽を形作った工芸品である。羽の部分を鑿で巻き上げて、薄くカールするには高度な技術が必要である。江戸時代の絵画では尾の部分がはねているが、昭和33（1058）年ブリュッセル万国博覧会に出品して銅賞を受賞したことを機に現在の形状に落ち着いた。昭和58（1983）年に福岡県知事指定特産民芸品に登録された。もとは天満宮の神職が作成していたが、平成５（1993）年に木鷽伝承のための講習会が行われたことをきっかけに、平成10（1998）年に木うそ保存会が発足して、現在は神職と保存会で製作している。木鷽は、平成23(2011) 年１月に「太宰府の木うそ」として太宰府市民遺産第１号に認定されている。

木鷽

木鷽制作風景

●連歌

中世に天満宮は連歌の中心的な場所となり、都から飯尾宗祇をはじめ多くの連歌師が訪れている。江戸時代になると黒田如水が連歌屋を起こし連歌は興隆し、天満宮での月次連歌、笠置連歌をはじめ武将の戦勝祈願祈祷連歌から変化した一般民衆の祈祷連歌が明治に至るまで広く奉納されていた。現在は「連歌屋」という地名の残る近くで、地元を中心とした人々で奉納が続けられている。